学歴・階層の関連構造と学歴意識

―― 1995年 SSM 調査データを用いた一試行 ――

村　澤　昌　崇*

1．はじめに

だれが学歴を重要視しているのか。本稿はこの問題について人々の意識面から切り込んでいくことを目論んでいる。このような，人々が学歴について抱く感情，意識を議論の俎上に乗せた研究はいくつか見られる（麻生 1977，竹内 1995，薬師院 1995，広島大学教育社会学研究室 1998など）。これら研究の重要性は，その成果とは裏腹に，学歴にまつわる客観的な事実とは別に，意識における学歴の有り様を，もう一つの現実として描き出したことにある。言い換えれば，社会における公式の解釈図式（佐藤 1993）に則って，学歴がどのようなものとして存在し，同時代の人々によってげんにどのように生きられているのか，を描き出したことだろう。

これら研究の多くは，学歴にまつわる意識にことさら焦点が置かれている関係上，観測された学歴とそれにまつわる諸変数（例えば出身階層・到達階層など）と学歴意識との関連性を適切に設定しないままに，客観的事実からは浮遊した学歴意識が存在するかのごとく，分析を行っているものが多い。故に本稿では，筆者がこれまでに行ってきた学歴意識関連の分析を修正・発展させることを通じて[1]，階層・学歴の関連構造と学歴意識との対応関係を探索的に素描してみたい。

2．先行研究の検討

「誰が学歴を重要視しているのか」－この問いに答えるための手がかりとしてはまず，学歴意識研究あるいは教育意識研究が上げられる。しかしこれら諸研究は，我が国教育社会学の主要なテーマであるにもかかわらず，学歴アスピレーション，あるいは教育アスピレーション，教育期待などの研究を除いてその蓄積は多いとは言えない(岩井・片岡・志水 1987，120頁，原田 1975，57頁)。他方，近年社会学における階層帰属意識研究の試みは，意識変数を客観的変数によって説明するという図式を越えようと，さまざまな試みがなされており(盛山 1990，友枝 1988，直井 1979，坂本 1988，友枝1988，間々田 1988，盛山 1990，吉川 1998)，なかでも階層帰属意識を別の主観的変数で説明することを試みた直井（1979)，友枝（1988)，吉川（1998）の試みは，学歴意識を分析する上でも敷衍することができる。

主観的変数と主観的変数の関連を分析する－これを下敷きにする場合，本稿の関心の一つは学歴重視度であるが，もう一つの意識変数は何を焦点とするか。ここでは実力と学歴とをいったん切り離して両者の関連性を問うという日本独特[2]の学歴社会観にも注目してみたい。苅谷（1995）によ

*広島大学大学教育研究センター助手

れば，新堀（1966）以来の学歴社会論は，学歴が本人の能力・実力を必ずしも反映していないにも関わらず過度に重視され，実力主義や能力主義とは対立する「属性」と見なされ，それによる処遇の差異を不平等と見なすような，いわゆる学歴主義社会批判論として展開され，そして「こうした学歴社会の認識は，その後の私たちの社会のとらえ方として広く普及した見方と共通する，いわばその原型ともいえる議論であった」（苅谷 1995,122頁）という。このような学歴社会観が，出身階層・学歴・到達階層と学歴重視度との関係を媒介する重要なキーとなっているのではないかと思われるからだ[3]。

3．分析データ・使用する変数・分析モデル

本研究で使用するデータは，1995年SSM調査のB票で得られたデータである。使用する変数は以下に示した。それら変数の基本統計量は表1に，分析モデルは図1に示した。

表1　変数の基本統計量・度数

		本人現職業威信	父職業威信
度数	有効	1081	1183
	欠損値	220	118
平均値		44.7	44.7
中央値		42.6	39.9
標準偏差		10.5	11.0
範囲		56.8	60.6

学歴重視	度数	パーセント	学歴＝実力	度数	パーセント
重要でない	172	13.2	そう思わない	176	13.5
あまり重要でない	531	40.8	あまりそう思わない	261	20.1
やや重要である	406	31.2	どちらとも言えない	312	24.0
重要である	167	12.8	ややそう思う	308	23.7
欠損値	25	1.9	そう思う	209	16.1
			欠損値	35	2.7
合計	1301	100.0	合計	1301	100.0

本人学歴	度数	パーセント	都市規模	度数	パーセント
9年	344	26.4	村	24	1.8
12年	682	52.4	町	296	22.8
14年	84	6.5	市5万未満	117	9.0
16年	175	13.5	市10万未満	152	11.7
18年以上	12	0.9	市20万未満	152	11.7
欠損値	4	0.3	市50万未満	258	19.8
			100万未満	65	5.0
			100万以上	237	18.2
合計	1301	100.0	合計	1301	100.0

①「実力＝学歴」：1995年SSM調査票[B票]問30cの「学歴は本人の実力をかなり反映している」についての5段階評価（1＝そう思わない，2＝あまりそう思わない，3＝どちらとも言えない，4＝ややそう思う，5＝そう思う）

②「学歴重視」：1995年SSM調査票，[B票]問27cの「高い学歴を得ることをどの程度重要だと思っているか」についての4段階評価（1＝重要ではない，2＝あまり重要ではない，3＝やや重要である，4＝重要である）

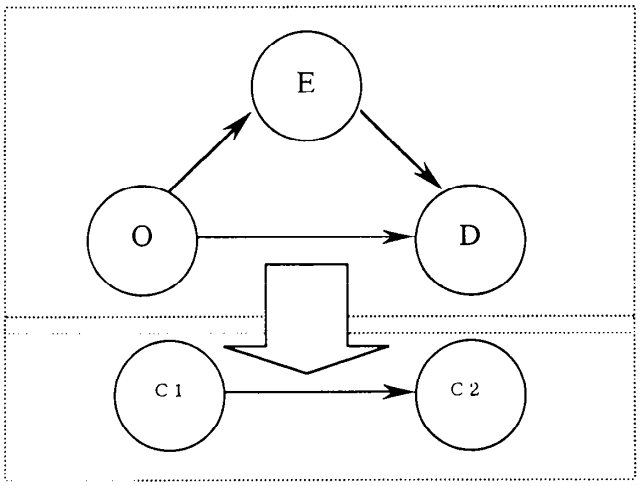
③都市規模[4]：現住所の人口規模のカテゴリカルデータ（1＝村，2＝町，3＝市5万未満，4＝市10万未満，5＝市20万未満，6＝市50万未満，7＝100万未満，8＝100万以上，9＝無回答，非該当）

④父職業：父親の職業を1995年版職業威信スコアで数量化したもの

⑤本人職業：本人の現在の職業を1995年版職業威信スコアで数量化したもの

⑥学歴：本人の学歴を教育年数であらわしたもの

社会階層と学歴意識との関係を見る上で，注意すべき点がある。第1は，本人の到達階層の時期区分である。これまでのSSM分析の多くが調査時点の全サンプル（20-69歳）を一括して扱ってきたが，これでは不適切である。なぜなら，企業に就職した者は20代では管理職にはなり得ない。高齢者の場合，長期雇用された会社を定年退職し再度別の会社に就職した場合，再就職先は名誉職であることが多く本人の「主な職業」あるいは「実質的な意味での最高到達階層」とはなり得ないだろう。要するに，キャリア上もっとも安定し且つ「主職」と呼ぶことができ，実質的な意味での（最終・最高）到達点の時期を明確にする必要がある[5)]。この方が，職業達成に対する学歴の効果を見る場合，より安定的且つ純粋な効果を測定できうるし，意識についても，年齢効果（若年層における職業の未達成，高年層における主職のリタイア）をある程度除去できるだろう。それゆえ，ここでは1995年SSM調査年のデータのうち，40-59歳に絞って，階層・学歴・学歴意識の結合関係のあり方を検討してみよう。



O：出身階層（父職威信），E：本人学歴，D：到達階層（本人現職威信）
C1：「学歴＝実力」意識，C2：学歴重視度

図1　分析モデル

4．分析結果1

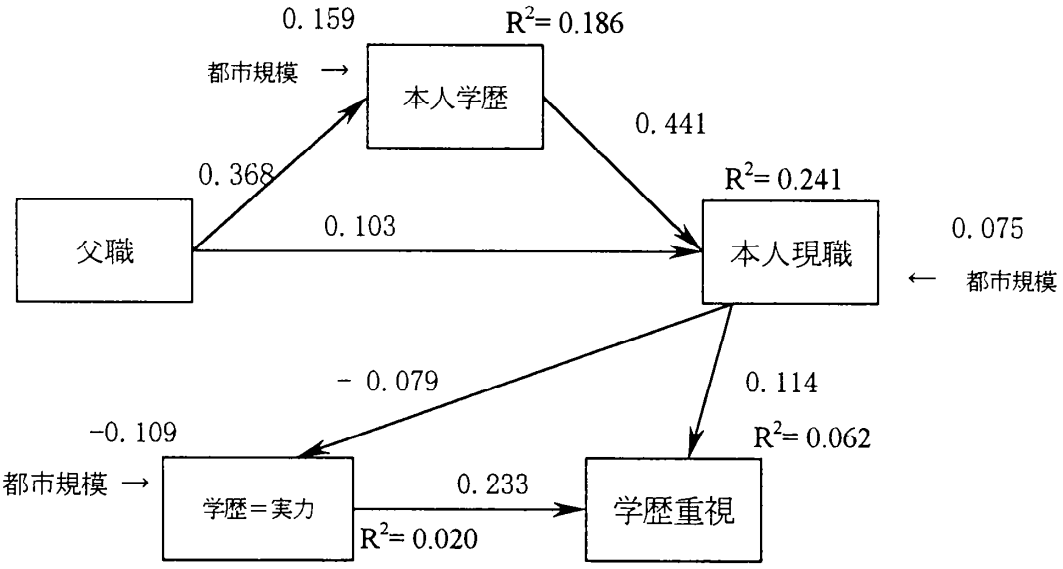
「父職」と「都市規模」を外生変数とし，最終的な説明変数を「学歴重視」とした逐次モデルを構築し，飽和状態（すべての変数間に逐次的なパスを引いた状態）から分析を開始し，有意でないパスを一つずつ消去し，カイ二乗値が有意でなくなる（0.05未満）直前の状態を図2で示した。カイ二乗値以外の適合度指標を見る限り，このモデルのデータに対するフィットは良い。以下パス係数から分析結果を概観してみよう。

① 階層の再生産過程について。父職は本人学歴，本人現職に対して有意な影響力を持っている。父職の本人現職に対する総効果は，0.103＋(0.368×0.441)＝0.265となる。父職の効果を統制した状態での学歴の本人現職に対する効果が0.441あり，出身階層の総効果はそれに比べると低い

が，依然として階層再生産が直接・間接（学歴を経由）的に見られる。

② 学歴と実力の関係についての評価の規定要因：直接効果を持つのは本人現職でその係数は，-0.079である。すなわち本人の現職威信が高いほど，学歴と実力は乖離していると評価し，現職威信が低いほど学歴と実力は一致していると判断しているのである。都市規模も同様に負の効果（-0.109）を持っている。

③ 学歴重視度：本人現職（係数0.114）と「学歴＝実力」が有意な影響力を持っている。すなわち，本人の到達階層が高い人ほど，学歴を重視する傾向にあり，到達階層が低い人ほど学歴を重視しない傾向にある。しかしその説明力は低い（$R^2=0.062$）[6]。



χ^2= 12.173, df= 6, p= 0.058, GFI= 0.995, AGFI= 0.982, CFI= 0.987, RMSEA= 0.036
N= 797（リスト単位でのサンプル削除の結果）
図中の係数は標準化偏回帰係数。すべて5％水準で有意

図2 父職・本人学歴・本人現職と学歴意識の関連

④ 階層の再生産過程は2つの異なる学歴意識を形成することが伺える。すなわち一つの意識形成経路は「本人現職」→「学歴重視」であり，もう一つの経路は「本人現職」→「学歴＝実力」→「学歴重視」である。特に後者は，本人現職威信が高いほど学歴と実力は乖離しているとみなしており，その結果学歴は重要ではないと表明している。他方本人現職威信が低い人は学歴と実力を一致したものと見なしており，その結果学歴は重要だと表明しているのである。

⑤ 都市規模は学歴および本人現職に有意な正の効果を持っている。そして「学歴＝実力」に対しては有意な負の効果を持っている。

ここではさらに詳細な分析を試みるため等質性分析（HOMALS）を行い，学歴に関する2つの意識変数(「学歴重視」「学歴＝実力」)，本人現職と本人学歴との関連性について検討した。なお，「学歴＝実力」・学歴・本人現職については次のような若干の加工を行った。

・「学歴重視」：4カテゴリー（1.重要ではない，2.あまり重要ではない，3.やや重要である，4.重要である）を3カテゴリー（2と3を「どちらでもない」に統合し，1.重要ではない，2.どちらでもない，3.重要である）に統合した。
・「学歴＝実力」：5カテゴリー（1.そうは思わない，2.あまりそうは思わない，3.どちらでもない，4.ややそう思う，5.そう思う）を3カテゴリー（1と2をまとめて「そうは思わない」，3と4をまとめて「そう思う」にし，1.そうは思わない，2.どちらでもない，3.そう思う）に統合した。
・学歴：3カテゴリ（中卒，高卒，大卒＜短大含む＞以上）に分類した。
・本人現職：SSM調査では主に職業8分類（専門，管理，事務，販売，熟練，半熟連，非熟練，農業）が用いられているが，学歴に関する意識との関連を分析する場合には，学歴がより反映されやすいと思われる被雇用と雇用を分ける必要がある。被雇用／雇用を区別した分類方法としてSeiyama(1994)の用いた職業6分類が一般的に用いられているが，ここでは被雇用をさらに明確にした佐藤（1998）の職業6分類（1）ホワイトカラー雇用上層：専門と管理の被雇用，2)ホワイトカラー雇用下層：販売と事務の被雇用，3)全自営：専門と管理と販売と事務と熟練と半熟連と非熟練の自営，4)ブルーカラー雇用上層：熟練の被雇用，5)ブルーカラー雇用下層：半熟連と非熟練の被雇用，6)農業）を参考にして，職業5分類（1）ホワイトカラー雇用上層，2)ホワイトカラー雇用下層，3)全自営，4)ブルーカラー，5)農業）を用いる。

5．分析結果2

等質性分析により，変数の各カテゴリーの関連性を2次元で表現したものが図3である。次元1及び次元2の固有値はそれぞれ0.432，0.408であり，データのおよそ84%がこの2次元で説明されることになる。この布置構造からおよそ次のような傾向が読みとれるだろう。

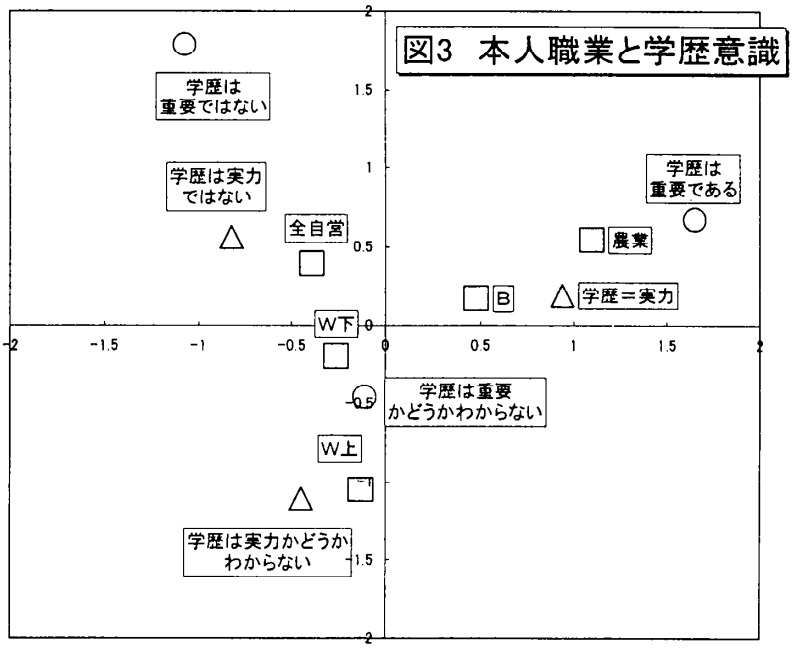


図3　本人職業と学歴意識

① 学歴と実力を一致しているものと見なし，且つ高学歴を重要と思っているのは農業層とブルーカラー層である。

② 学歴と実力が一致しているかどうか，学歴が重要であるかどうかいずれかについても判断を保留しているのは，ホワイトカラー上層とホワイトカラー下層である。

③ 自営業者は学歴の重要性については評価が多様であるが，学歴と実力の一致性に関してははっきりと「一致していない」と判断している。

④ 「学歴は重要ではない」と断言している特定の職業層は見あたらない（「学歴は重要ではない」というカテゴリーが一つだけ離れた位置に附置していることから）。

このように，ホワイトカラー上層，下層は，「学歴と実力とは一致しない」「学歴は重要ではない」と断言はしないものの，学歴に対して肯定的な評価を下しているとも言い難い。一方農業・ブルーカラー層は，学歴と実力を一致したものと見なし，学歴の重要性を積極的に受け入れている。それぞれの職業階層に所属している人々の学歴に関する意識は，全自営が若干特異な附置をしているが，およそパスモデルの分析と相容れないものではない。

6．考察

6.1．自己正統化と負け惜しみとしての「学歴重視」

父主職が有意でなく本人現職だけが「学歴重視」に正の有意な効果を持つ。これはすなわち職業達成競争において敗れた者が「学歴は重要ではない」という意識を抱いていることを意味する。つまり「負けたから」「学歴は重要でない」ということであり，単なる敗者の負け惜しみに過ぎない。しかし，父職→本人学歴→本人現職というパスが有意につながっていることを考慮に入れると，「レースに敗れたのは，自分のせいではなく，学歴を媒介とした階層再生産が依然として存在しているからだ」という不満のあらわれと解釈することもできる。他方職業達成の勝者は，その勝利をメリトクラティックな学歴システムに帰責させているが，自身の職業達成自体が学歴を媒介とした階層再生産の産物でもあったことに留意せねばならない。このことを考慮に入れると，実は勝者の「学歴は重要」という意識は，「メリトクラティックな学歴システムの効果を実感した」ことのあらわれではなく，むしろ学歴を媒介とした階層再生産システムを上手に利用したことをクールに評価しているのではないか。すなわち彼らは，形式的には機会均等を謳っていながら，実質的には入り口ですでに不平等を作り上げ，そのまま不平等を維持している学歴システムが，彼ら高階層所属者にとって好都合なシステムであることを見抜いており，この不平等なシステムの中で敗者とならないためには，たとえ形式と実質が乖離していようが，学歴は重要な手段だと感じているのだ。実際に，現職威信の高い者が，学歴と実力との関係を問われたときに「学歴は必ずしも実力を反映していない」と答える傾向があるのは，自分たちに都合がよいこのシステムが「階層再生産のシステム」であり，メリトクラティックなシステムでないことを十二分に承知していることを物語っている[7]。

6.2. 学歴と実力との関係を論じることの意味

しかし，ここで改めて注意せねばならないのは，学歴と実力との関係を問われたときに，現職威信の低い者が「学歴は実力を反映している」と表明し，さらに「学歴は重要」だと結論づけていることだ。階層再生産の結果不当に，あるいは実力の結果として，相対的に敗者となった彼らにとって，負けたことの憂さ晴らしであれ不平等に対する不満の表れであれ，「学歴は重要なもの」ではなかったはずだ。高い地位達成をなしえた者が，階層再生産の温存する世の中を上手に泳ぎ切ったという意味での「勝利者」であることに後ろめたさを感じ，「敗者」を冷却（広義）[8]する意味で「学歴は実力じゃあないよ」と告白することは自然だし（現実には，ホワイトカラー層が学歴と実力の関係を曖昧なものと見なし，学歴の重要性を低く評価することで「冷却」を行う），平等主義浸透の結果，ノンエリートに差別感を与えまいとする心性を獲得した学歴エリートの傾向であるとも言える[9]。しかし，相対的に低い地位達成に終わった者の意識は，冷却（狭義）では説明しきれない[10]。もし自分自身の失敗（到達した地位が相対的に低い）への適応戦略として自分自身を冷却するのであれば，「学歴は実力でないから重要ではない」というロジックで，学歴の価値を相対化するはずだからだ。そして分析対象が40歳～60歳に限定されているので，もちろん「再加熱」されているわけでもない。

6.2.1. 今の自分を素直に受け入れているのか？

この問題については明らかに分析の枠を超えるので，以下いくつか仮説的に呈示したい。まず考えられるのは，階層的に下層にいる人々が今の自分を素直に受け入れているのではないか，ということである。「学歴は実力を反映しており，社会的成功に重要だ。しかし自分は結果的には低い社会的地位にあるが，これが分相応なのだ」と[11]。

6.2.2. 階層間調和機能

もう一つの仮説は，学歴と実力の関係を論じることが，社会階層上層と下層双方にとって，調和の機能を果たしているのではないか，ということだ。パス解析の結果で「本人現職→学歴重視」のパスはおよそ図4のような構造を持ち，階層間に緊張をもたらしかねない。これは相互行為のプロセスループ[12]を下敷きにしたものだが，たとえばエリートが，あるきっかけで下位階層の「学歴なんて重要ではない」という発言を耳にしたとしよう。上位階層は学歴エリートでもあるから，こうした下位階層の発言は面白くない。故に下位階層に対するイメージが悪くなり，下位階層を意識して「学歴は重要だ」という発言をする。すると学歴ノンエリートでもある下位階層はそのような上位階層の発言に対して面白くないのは当然で，以前よりもさらに学歴の重要性を過小評価する。その結果，上位階層はますます下位階層に敵愾心を燃やし，学歴の重要性を過大評価する。このように，階層間の関係が崩壊するフィードバックが繰り返されていく。

しかし，パス解析で見られた「本人現職→学歴＝実力（→学歴重視）」のパスは，図5のような構造を持ち，階層間の緊張を和らげる効果を持っていると考えられる。たとえば下位階層が，あるきっかけで上位階層の「学歴は実力ではない」という発言を耳にしたとしよう。下位階層は学歴ノ

ンエリートでもあるから，こうした発言は彼らにとって癒しの効果を持つ。故に上位階層に対するイメージが良くなり，上位階層を意識して「学歴は実力だ」という発言をする。すると学歴エリートでもある上位階層はそのような発言に対してエリート心をくすぐられるから，下位階層に対するイメージは良いものとなり，以前よりもさらに「学歴は実力ではない」と評価する。その結果，下位階層はますます上位階層に親近感を抱き，「学歴は実力だ」と評価する。図4の関係のままだと，階層間の関係は悪化し崩壊しかねないので，関係改善のために学歴と実力の関係を問う，のである。

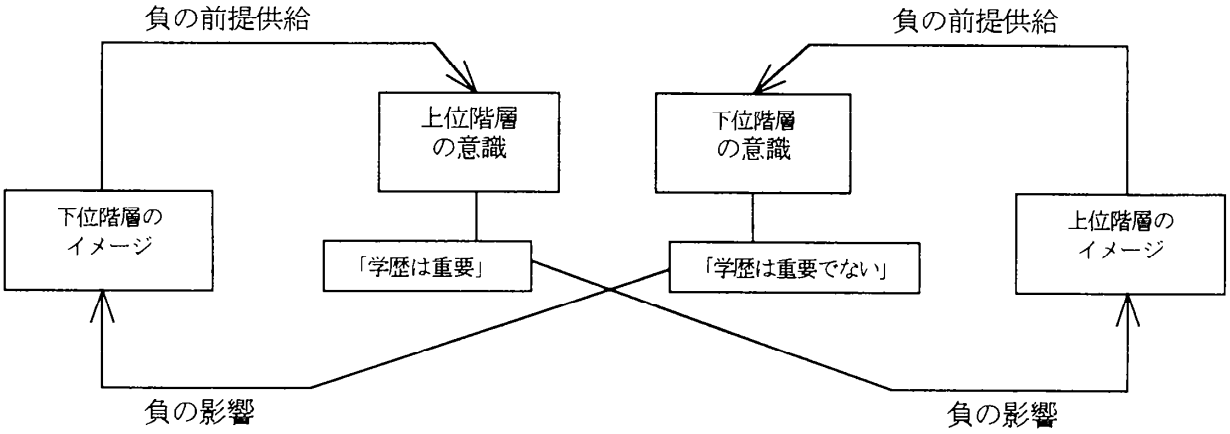


図4（↑）

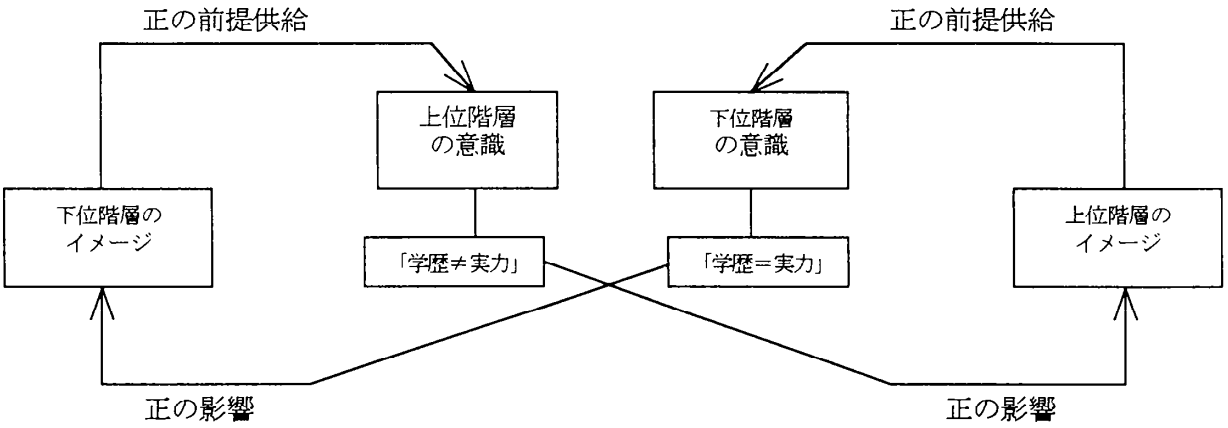


図5（↑）

上位階層の人や下位階層の人が，ホンネの部分で学歴と実力との関係をどう思っているかは，この場合どうでも良い。むしろ公の場で学歴を語るときにどのような「了解」[13]が人々の間に形成されているかが問題なのだ。上位階層の者は「学歴は実力と関係ない」と語り，下位階層のものは「学歴は実力だ」と語る－公的な場での学歴と実力の関係は，そのように「語られるように」人々の間に「了解」されているのだ。

6.3. 都市在住者の「学歴アノミー」

他方学歴関連意識は，都市規模に影響を受けていることが今回の分析から確認された。特に都市部在住者は「実力主義的学歴社会観」を抱いておらず，それ故に学歴に高い価値を見出せないでいる[14]。人口の多い都市部では，同じ学歴・学校歴であっても異なるライフヒストリーを持つ人が多いことは容易に想像できる。また今日がいわゆる大衆消費社会，すなわち＜物語＞が商品ごとに人ごとに多様に分化し，消費の動機形成が不透明になった時代（宮台 1994，143-144頁）だとすれば，同様に今日は，教育にまつわる＜物語＞が，教育の種類・内容ごとに，人ごとに多様に分化し，教育の需要供給にまつわる動機形成が不透明になった，高度学歴社会あるいは大衆教育社会を迎えつつあるといえる。都市部在住者は，このような環境の複雑性がもたらす「学歴モデルの不在」（こんな学歴を持っていればこのような人生が歩めるというモデルの不在）に直面しているのではないか。それゆえに，学歴と実力が一致していると思えないし，学歴に価値を見いだせない。こうした人々は「学歴アノミー」（自分が準拠する学歴集団あるいは自分が拠り所とする学歴モデルが不安定であるか崩壊しているか，あるいは存在しないような，学歴に関する無連帯・無規範状態）に陥っているのかもしれない。

6.4. 残された課題

しかし実際のところ，分析モデル自体は有意であったものの，階層・学歴の学歴意識に対する説明力は小さいと言わねばならない[15]。この点から見れば，学歴にまつわる意識は，出身階層・学歴・到達階層の結びつきといった客観的な事実関係からはある程度独立したかたちで，人々の間で語られているとも言えよう[16]。

残された課題も少なくない。今回は男女を区別せずに分析を行ったが，女性の意識世界の構造についての分析が残されたままである。また，分析では若干特異な位置にあった自営業に関する分析も残されている。また，学歴意識の時代的な変化を見る必要があるが，現実的には学歴関連意識についてSSM調査では過去に一貫した形で聞かれたものは皆無である。このようにデータが一時点だと加齢効果・コーホート効果・時代効果の分離は非常に困難である。この点においては，意識関連の変数が今後SSMのような日本全国を母集団とした，定点観測によるデータとして蓄積されることに期待したい。

［付記］本論文を執筆するにあたっては，1995年SSM調査データを使用した。データの使用及び結果の発表については，1995年SSM調査研究会の許可を得た。

【註】

1）本稿では，以前に分析・検討した拙稿（1998）のモデルを改良することを試みている。以前のモデルでは，潜在変数を導入した共分散構造モデルにより，出身階層，到達階層と学歴意識との関連を分析したが，必ずしも安定的な解が得られていない。たとえば84頁の有職男性の分析結果

では，誤差変数間に相関を認めた状態で，初めて適合度指標すべてが経験的な適合度水準を満たしている。Arbuckle(1997)，狩野(1998,1999)も指摘しているように，誤差間の相関は実質科学的に意味あるものでない限り，慎むべきである。なお，誤差間に相関を認めない状態では，カイ2乗値が有意水準を満たさなかった（誤差間に相関を認めた場合のp値=0.644，誤差間に相関を認めない場合のp値＝0.000)。狩野（1997）および狩野・市川（1999）では，サンプル数が300～400程度を越えるときは，カイ2乗値よりもむしろ GFI, AGFI, CFI, RMSEA を適合度指標として用いるべきとしているが，誤差相関を認めない状態での適合度指標は，GFI = 0.945, AGFI = 0.899, CFI = 0.896, RMSEA = 0.091 であり，モデルのデータに対するフィットは悪くはないが，実際のところはグレーゾーンである。そこで本稿では潜在変数導入による希薄化の修正を犠牲にして，測定変数のみによるモデルを構築することによって，データにあてはまりの良いモデルの構築を目指した。

2）この点に関しては，苅谷(1995，124-131頁)を参照。

3）近年，教育意識と（学歴）社会構造の認知との関連という形で，学歴・教育関連意識間の結合関係を扱ったものが散見されるようになった（阿部 1996，山口 1997，中村 1998，大前，1998)。本稿はこれら研究と基本コンセプトは共有しつつ，パスモデルを援用した探索的分析を試みることにより，新たな知見を提示することを目指した。

4）都市規模は，学歴を媒介とした再生産構造と意識の有り様にとって重要なファクターとして本稿では位置づけている。一般的には，都市部では教育機会や就職機会が開かれており，それだけ学歴獲得や職業達成が容易であるが，地方部ではその地域の人口や産業発展に即応した形で，教育機会や就業機会が都市部に比べると限定されているからである。

5）佐藤（1998，41頁）を参照。

6）リスト単位でのデータ（N＝1301）を用い，同じ仮説モデルを適用した分析結果をマトリクス形式で次に示す。

	本人学歴	本人現職	学歴＝実力	学歴重視
父職	0.390	0.076	0.062	—
都市規模	0.111	0.075	−0.079	—
本人学歴	—	0.445	−0.085	0.081
本人現職	—	—	−0.073	0.072
学歴＝実力	—	—		0.235
R^2	0.183	0.253	0.024	0.065

適合度指標は，$\chi 2$ = 2.158, df = 2, P = 0.340, GFI= 0.999, AGFI = 0.994, CFI = 1.000, RMSEA = 0.008 となっており，フィットは良い。表を見てもわかるように，本文での分析結果と異なる点は，①「学歴＝実力」に対して有意なパスが本人現職と都市規模以外に本人学歴が負の効果（0.062)，父職が正の効果（0.062）として加わったこと，②学歴重視に対しては，本人学歴の正の効果（0.081）が加わったことである。

7）苅谷（1995，189-197頁）の指摘するように，教育の画一的平等化と公平な選抜の導入が結果

の不平等を容認する基盤を作り出したのであれば，形式的には平等を保証しながら結果的に不平等を再生産している学歴システムに対して，人々は結果の平等を容認する形で一様に「重要である」と評価を下してもおかしくはない。しかし実際は結果の不平等を反映する形で，学歴の評価は階層の上下で割れている。

8）竹内（1995 頁）を参照。

9）高学歴→高職業威信→「学歴は重要」というパスが有意に繋がっていることに依る。

10）この場合の冷却は，狭義の冷却，すなわち「リアリティの変換」を意味する。竹内（1995 74 頁）を参照。

11）アスピレーションにおける「縮小」（竹内　1995,74頁）機能と酷似している。

12）宮台（1991 79頁）を参照。

13）「了解」は，別の言葉で「公式の解釈図式」（佐藤　1993）と言い換えられる。

14）広島大学教育社会学研究室(1998)の分析結果でも，「理念型学歴社会論」（誰にでも学歴を得る機会が与えられている＋学歴獲得の決め手は本人の能力・努力である＋社会的地位は本人が獲得した学歴によって決まる）が高年齢層には支持率が高いが，若年層の支持率が低いことを指摘している。

15）決定係数に着目してみると「学歴＝実力」は0.020,「学歴重視」については0.062であり，説明力は低い。

16）この点に関しては苅谷（1995，196頁）を参照。

【引用・参考文献】

阿部晃士「高校生と両親の出世観－社会の仕組みに関する認知・理念・不公平観」鈴木昭逸・海野道郎・片瀬一男編『教育と社会に対する高校生の意識－第３次調査報告書－』東北大学教育文化研究会，1996年，43-58頁。

麻生　誠『学歴と生きがい－“学閥”への抵抗と追従』日経新書，1977年。

Arbuckle, J.L, *Amos Users' Guide Version 3.6*, SmallWaters Corporation, 1997.

原田　彰「「教育意識」研究の動向と課題」『人文学』第128号，1975年，57-83頁。

広島大学教育社会学研究室「学歴意識に関する調査研究（１）」広島大学教育社会学研究室編『教育社会学研究室年報』第１号，1997年，1-32頁。

Hoyle, R. H., *Structural Equation modeling: Concepts Issues and Applications*, Sage Publications, Inc, 1995.

藤田英典「社会的地位形成過程における教育の役割」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会,1979年,330-361頁。

Ishida, Hiroshi *Social Mobility in Contemporary Japan: Educational credentials, class and the Labour Market in a Cross-National Perspective,* The Macmillan Press Ltd., 1991.

石田　浩「学歴と社会経済的地位の達成-日米英国際比較研究-」『社会学評論』第40巻，1989年，

252-266頁。

岩井八郎・片岡栄美・志水宏吉「「階層と教育」研究の動向」『教育社会学研究』第42集，1987年，106-134頁。

狩野　裕『グラフィカル多変量解析』現代数学者，1997年。

狩野　裕・市川雅教「共分散構造分析」日本統計学会チュートリアルセミナー（第7回）配付資料，1999年。

苅谷剛彦『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史—』中公新書，1995年。

吉川　徹「階層評価基準の静かな変容」間々田孝夫編『1995年SSM調査シリーズ6　現代日本の階層意識』1995年SSM調査研究会，1998年，1-21頁。

間々田孝夫「日本経済の変動と「中」意識—成長説と平等説の検討—」1985年社会階層と社会移動全国調査委員会編『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 第2巻 階層意識の動態』1988年，43-70頁。

間々田孝夫「階層帰属意識」原純輔編『現代日本の階層構造 ② 階層意識の動態』東京大学出版会，1990年，23-45頁。

宮台真司『制服少女たちの選択』講談社，1994年。

村澤昌崇「誰が学歴に重きを置くのか—学歴意識の関連構造の分析—」岩本健良編『1995年SSM調査シリーズ　9　教育機会の構造』1995年SSM調査研究会，1998年，75-94頁。

中村高康「世代間移動の認知パターンと高学歴志向－日本社会における教育熱の心理的メカニズムに関する分析」苅谷剛彦編『1995年SSM調査シリーズ 11　教育と職業－構造と意識の分析』1995年SSM調査研究会，1998，年，199-216頁。

中山慶子・小島秀夫「教育アスピレーションと職業アスピレーション」.富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会，1979年，293-328頁。

直井道子「階層意識と階級意識」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会，1979年，365-388頁。

大前敦巳「学歴獲得様式における意識構造」『1995年SSM調査シリーズ10　教育と世代間移動』1995年SSM調査研究会，1998年，67-98頁。

坂本慶行「「階級帰属意識」の規定要因－その時間的な変化と国際比較の視点から－」1985年社会階層と社会移動全国調査委員会編『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 第2巻 階層意識の動態』1988年，71-100頁。

佐藤俊樹『近代・組織・資本主義—日本と西欧における近代の地平—』ミネルバ書房，1993年。

佐藤俊樹「被雇用者の職業再生産と階層－階級意識」『日本労働研究雑誌』No.455/May, 1998年，40-49頁。

盛山和夫「中意識の意味」『理論と方法』第8巻，1990年，51-71頁。

Seiyama, K., "Intergenerational Occupational Mobility." Kenji Kosaka, ed., Social Stratification in Contemporary Japan, Kegan Paul International, 1994.

新堀通也『学歴－実力主義を阻むもの』ダイヤモンド社，1966年。

SPSS, *SPSS Categories 9.0,* SPSS Inc., 1999.

竹内　洋『日本のメリトクラシー－構造と心性』東京大学出版会，1995年。
友枝敏雄「社会的地位と階層帰属意識」1985年社会階層と社会移動全国調査委員会編『1985年社会階層と社会移動全国調査報告書 第2巻 階層意識の動態』1988年，21-42頁。
薬師院仁志「学歴社会の仮想現実」竹内　洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社，1995年，79-93頁。
山口　洋「学歴に関する社会イメージと子供に対する教育期待」『金沢大学文学部論集　行動科学・哲学編』第17巻，1997年，61-68頁。
山本嘉一郎（編）『新版ＳＰＳＳ　オプション編』東洋経済新報社，1999年。
山崎博敏・島田博司・浦田広朗・藤村正司・菊井隆雄 「学歴研究の動向」『教育社会学研究』第38集，1981年，94-109頁。

Images of Meritocratic Credential Society and Consciousness of Needs for Educational Career

— One Analysis of Educational Consciousness —

Masataka MURASAWA*

Why many people try to get higher educational credentials? Some researchers have tried to solve this question using some approach. Some studies focused on consciousness of educational credentials. However, most studies have tried to analyze the relationship between social origin, educational attainment, occupational attainment and educational aspiration, pay little attention to consciousness of educational credentials themselves. Therefore we have not solved and formalized actual situations of consciousness about educational credentials yet.

This study focus on the consciousness of educational credentials, especially the relationship between images of meritocratic educational credential society and consciousness about importance of educational credentials in contemporary Japan by using the data of the 1995 SSM surveys.

Findings are as follows. Firstly, the reproduction structure of the hierarchy through the educational attainment is seen.

Secondly, The evaluation of the importance degree of the educational credential is influenced by neither father's job nor person's educational attainment, and has received only a positive influence from their present job.

Thirdly, the consideration of the relation between the educational credential and ability is influenced by person's present job (negative effect). That is, the person of a high-ranking hierarchy is evaluating the educational attainment as no ability. And they are evaluating that the educational attainment is not important on that. Oppositely, the person in the subordinate position of the hierarchy considers that the educational attainment reflects ability, then it is evaluated that the educational attainment is important on that. Especially, the farmer and the blue collar worker consider that the educational attainment reflects ability, and are feeling it is important the educational attainment. White-collar cannot judge the educational attainment to be corresponding to ability, and they are reserving the judgment whether the academic background is important.

Fourthly, on the other hand, those who live in the city are evaluating the academic background as no ability, and they are evaluating that the academic background is not important on that.

*Research Associate, R.I.H.E.,Hiroshima University

But these images and consciousness about educational credential are not affected by social origin, educational and occupational attainment (because R-squared values are too small).

After all, educational consciousness makes another real world independently from "objective" world.